

戰時國民幼稚園

戰下常態感 (八)

倉橋惣三

今はもう非常時さいふ言葉は用ゐられなくなつた。この言葉のもつ覺悟は正しいとして、そこに何もなく感じられる臨時性、一時性が今日の實狀に合しないのである。常時さいふこゝを基準にして、何かしら特殊のさいふ感じが適切でないのである。今はもう、これが常時であるを感じがためられてゐる。

しかも、戰爭前の無事生活に永く慣れて來たものにまつては、今日の生活態のあれもこれもが、常、即ち、以前の狀態と違つてゐるこゝを感じられる。それが尋常でないさいふた感じられ方でもある。そして、大きな意義ではよく分つてゐて、小さい末梢の不自由や缺乏が、常ならず感じられたりする。しかもこれは、今に即しないで以前の思ひ出に即してゐる痴愚の思ひに過ぎない。

こゝろが、こゝに、その「以前」なるものを知らぬ子ぎもにまつてはさうであらう。今はくらべて彼れ之れを感じたりする標準をもたぬのである。以前の冬は炭が多かつたことも知らない。以前の米は純日本米で、以前のお辨當には大きな牛肉と鶏卵の料理が常であつたことも知らない。お菓子も毎日あつて、うんち甘くて、たべ過ぎないやうにこぼかり注意されてゐたこゝなき、昔話の中のこゝに過ぎない。この緊縮、この粗末、これを生活のあたり前さしか感じてゐない。くらべる過去がないから、過去の體驗を將來に置いて眺める夢もない。そうして、平然として之れを常態と感じてゐるのである。

實に之れが常態である。恐らく長期百年の常態であらう。我まんでもなく、忍苦でもなく、これがこのまゝに我等の生活の常であるに覺悟せられてゐる。さすれば之れを非常と思つてはならぬ。少くも非常と思ふても何の意味があらう。寧ろ之れを常態感に於て迎へてこそ、生活の眞に徹するさいふものである。

非常と感ずるこゝろに、一味の常時的油斷が残る。幸にして之れをしか知らない幼き者に、之れを非常と感ぜさせる要はない。子ぎも等の前に寒いさいふまい。まづさいふまい。甘くないさいふまい。之れに耐へるさいふよりも、之れを當然尋常として平氣で居よう。そして、われ／＼が平氣であるこゝによつて、幼き者—今日からの日本を擔ふて呉れるものゝ常態感を、假りにも動搖させるこゝをすまい。